アブストラクト

札幌の一般市民約 100 名に対して、Kitayama et al.（2006）による帰属シナリオを基に作成された 3 種類の帰属シナリオ質問（オリジナルバージョン、新バージョン、新バージョン 2）を実施した結果、オリジナルバージョンの帰属尺度では内的帰属傾向と外的帰属傾向の間に強い正の相関が見られること、内的帰属傾向および外的帰属傾向のいずれもIQおよび実験ゲームのインストラクション理解困難度との間に強い相関が見られること（IQ が高いほど、また理解困難度が低いほど内的帰属傾向も外的帰属傾向も強い）など、その妥当性を疑わせる結果が示された。こうした問題は新バージョン、新バージョン 2 のいずれにおいても確認されなかった。また、本研究に参加した札幌の一般市民は、オリジナルバージョンを用いた場合には、Kitayama らの研究において北海道外生まれの北海道大学生および京都大学生が示したのと同程度の、弱い内外帰属差（内的帰属マイナス外的帰属）を示したが、新バージョンおよび新バージョン 2 を用いた場合には、Kitayama らの研究においてシカゴ大学生が示したよりも大きな内外帰属差を示した。この結果は、一方ではこれまでの帰属の日米差が帰属の測定方法が生み出したアーティファクトである可能性を示唆すると同時に、Kitayama らのフロンティア精神仮説が想定するように、北海道住民はアメリカ人と同程度に高い相互独立性を有していることを示唆するものと解釈することも可能である。

キーワード：内的帰属、外的帰属、文化的自己観、北海道